共同研究

# 我が国における幼児保育史

山下俊郎
村山貞雄

わたくしたちは、わが国の幼児保育史について、ここ一年足らず研究を進めて参ったのでありますが、この実際の内容について、中間報告をさせていただきます。

わたくしたちの研究で、まず問題になったことは、歴史のみかた、いわゆる史観の問題と、時代区分の問題であります。

この両方とも、非常に困難な問題であり、熱心な議論がたたかわされたのでありますが、まだ委員全員の意見の一致というところまでは、いっておりません。たとえば、制度を主として研究している委員は、終戦のところを非常に大きく考えますし、実際の教育方法を主として研究している委員は、それほど大きくは考えていません。

次に、今までに研究されたものについて、初めの方から申し上げたいと思います。

まず問題になりますのは、わが国の幼稚園のはじめであるといわれている東京女子師範学校の附属幼稚園ができる以前の幼児保育の状態であります。当時は、幼児すなわち六才以下の学齢前児童も小学校に入学しています。江戸時代の末期、寺小屋に数え年五才ぐらいの幼児が入っていましたが、そのつづきとして幼児が小学校に入っているのであります。

しかし、このように幼児期の学校教育といっても、それがいわゆる児童期の子どもをとりあつかう小学校で勉強している場合は、一応別に考えることにしました。そして、幼児に対して幼児のための学校、すなわち幼稚園をもうけようとした理由は、どんなものがあったかということをしらべました。

その結果、おもな理由として考えられるものは、「幼児の保護」ということと、「小学校への入学準備」ということと、それから、「兄や姉の就学促進のため」ということであります。

たとえば、京都市の柳池小学校の幼稚遊戯場では、「郡児ノ街頭ニ飄遊シ鄙野ノ悪弊ヲ被ムル」を防ぐと共に、「遊嬉中ニ於テ英才ヲ養ヒ……他日勉学の基ト」となそうとしており、結局「幼児保護」と「小学校入学準備」という二つの目的が認められます。さらに、明治八年、埼玉県で「幼稚院」の設立が企てられたとき、「学齢以下ノ子女ヲ教育シ小学へ入ルノ指針トスル」ことが目的とされています、その他奈良県で幼稚園が開設されようとしたときのことや、田中不二磨の理事功程や、明治九年の文部省役人の地方学童報告など

にも、この資料があらわれています。

以上のように、小学校に入るためとか、姉さんや、兄さんを小学校へ入れるためということが、幼稚園教育の大きな目的として考えられたということは、人々が明治の初期の幼児教育において、どれ程教育上の課題を意識していたかということを示唆するものであるといえます。

以上三つの目的のうち、兄姉の就学の促進を除いて、「保護」と「小学校への準備」の考えは、いまでも田舎では相当残っておりますし、保育所の大きな目的となっておりますので、歴史的に重要な問題を含んでいると考えられます。

また、このようなふんい気にあってできた、女子師範の付属幼稚園は、一面では幼稚園教育を上流階級のものにしたと非難されますが、一面には、幼児期を積極的にみとめて、幼児の学校をつくりだそうとした功績も認められねばならないと思います。

次に、明治九年に女子師範の附属幼稚園ができて以来、プリントに出しておきましたが、方々に幼稚園ができたのでありますが、そのできかたをみますと、「母の会」とか「母の教室」というような幼児教育にかんして、盛り上るふんい気が生じており、そこに丁度、宣教師が来るとか、保育について知っている人が来るなど、適当な人が来た結果、何となく、たがやされた畑に種子がまかれたようにして、幼稚園ができ上ったところが多いのであります。

たとえば、岩手県で一番早い盛岡幼稚園の例をとりますと、ある婦人が、近所の母親が、子どものわがままや間食に気をつけないことを気にして、保育会をつくって、同志の婦人と一緒に女学校の補習科の有志に手つだってもらって女学校の教室を借りて保育をやっていました。

ところが、女学校の教室がせまくなって来ましたので、閉鎖されてしまったのですが、町の人々が残念におもっているとき、タッピングという東京の築地で幼稚園をやっていた人が宣教師として、盛岡の教会にふ任して来ました。

そこで、この人に保育会をひきうけてくれないかと相談したところ、乗り気になって、ひきうけてくれました。この人の家が丁度、もとの家老の家で広いので、ここを解放し、床やたたみのある座敷で、保育をしております。また母の会をしましたが、子どものパンツなんかの縫い方を教えてよろこばれています。たとえば、その頃の写真をみますと、立派な日本間の一隅でタッピングがピアノをひいており、ざしきでは子どもたちが遊んでおり、タッピングの男の子が庭の樹に登ってそれを眺めているものなどがあります。

ところが、たたみでは都合が悪いというので本式の幼稚園ができ上っていますが、このように、幼稚園の下地のあるところに適当な人が来て、でき上っていくすがたが諸所にみられます。

つぎに保育所についてでありますが、保育所については、託児所の発生した社会的基盤の考察に努力しました。その結果、いろいろな類型を考えて、これらの類型について歴史的に考えました。

たとえば、第一に新潟の静修学校の附設託児所や鳥取の下味野村子供預り所のように、有識者、篤農家によって農村地帯に生れたもの。第二に、東京の大日本紡績株式会社や三井田炭坑のように、婦人労働者の必要から会社の手によって附設されたもの。第三に東京の二葉幼稚園や神奈川の警醒小学校附属児童教育所のように宗教、とくにキリスト教が多いのですが、宗教団体がバックとして都会の貧しい幼児たちを対象に設立されたもの。第四に、神奈川の相沢託児団や神戸市婦人奉公会保育所のように軍人遺家族保護の必要から

生れたものなどいろいろな類型に分けて考察しました。

保育所そのものに適する保育方法の発達のすがた、とくにその学問的な研究と実際について考察しました。

保育所はまずしいものを対象にしているので、ただ遊んでやるだけだという印象を今だに多くの人が持っていますが、歴史的にみても、保育所の保育方法は長いあいだ幼稚園からの借り物で済まされてきております。しかし、やがてこの状態にたいする反省がおこなわれはじめ、託児所保育の研究がはじまりますが、その端緒は、帝大セツルメント託児所（大正十二年）を中心とする保育研究の動きにあるように思い、その研究をすすめております。

また、現場の動きに対応して児童心理担当者たちの活動が目立ってきます。山下氏の「教育的環境学」（十二年）などの研究ができたのもその頃であります。

次に問題になりましたことは、幼稚園や保育所における、公立と私立との時代的変化であります。このことは、一見、形式だけのことのように見えますが、案外幼児保育の成立における本質的な問題を含んでいるのではないかと考えて、この経過について研究中であります。この公私の変遷とならんで大切なものに、「宗教」の影響ということがあります。

この宗教の影響ということは、保母養成機関の発達を調べるときに、さらに大きな問題として、大うつしになってくるのであります。

すなわち、保母養成の必要性については、先覚者が常に、声を大にして力説し、関係団体が種々な建議をしているにもかかわらず一向に保母養成に関する国家の適切な処置が構ぜられませんでした。

すなわち、明治十一年に東京女子師範学校に、保母練習科が開設されましたが、十三年には廃止されてしまっており、本科に保育理論が入れられましたが、本科卒業者は幼稚園の先生になる者がないという状態でありました。また、二十九年から三十四年まで練習科が、もうけられましたが、これも当初は四か月の短期間でありました。このような時期に、キリスト教諸団体のうごきは盛んで、明治二十二年には、アンニー・エル・ハウ女史によって、頌栄保姆伝習所がつくられ、フレーベルの幾多の著書が訳されています。また、修業年限も、主任保姆になろうとするものには三か年、その他の保姆には二か年という長いものでありました。また、小学校の教諭よりも修業年限を長くするということさえ行っているのであります。

幼稚園教育が、法律もきびしくなく、公立も少なく、その上同時に幼児の母などに、布教できるという点に眼をつけたものでありましょうが、当時のキリスト教に対する風当りの盛んな中でよくがんばり、さらに二十八年には広島女学校附属幼稚園保姆科、三十四年には名古屋柳城保姆伝習所の開設というように保姆養成に努力し、大正十年迄にキリスト教の保姆養成所は八校以上を数えるに至っております。このとき、他の保姆養成所は三つしかありませんでした。このようにキリスト教関係者が幼児教育思想の移入や修業年限の長い保姆を出したことは、わが国の幼両保育史を考えるうえに見逃せないことであります。

さらに、大正時代に入って、新教育運動と幼稚園の関係、幼児心理学の発達と幼児保育の連関などを、各委員が分担して、しらべつつあります。また、さらに第二次世界大戦中の教育方法や、疎開の問題、それから終戦を、幼児保育史の上でどのようにとりあつかうか、というような問題がありますが、今日は中間報告でありますし、わたしたちの研究も、前期の方でまだ足ぶみしておりまして、発表まで進んでいませんので、これ位にしておきます。